園長通信～こころ～ №１２５

勝負の授業

2024.10.21

９月２４日の１１３号「故郷」で、中学校の国語の授業を紹介した。その授業者から、丁寧な手書きのお手紙をいただいた。この先生は、ここのところ「殻を破る」というタイトルで、４号分も使って書いてきた『故郷』の授業を行った先生のために、その先生がつくった指導案で授業を行った方である。他の先生がつくった設計図で授業を行ったのである。人の設計図を、すっかり自分のものとして授業をした。その授業はすばらしかった。

その先生は、９月２４日の「園長通信」を、「嬉しくて、何度も何度も読みました。そして家族にも自慢しました！！」とのことだった。文面にそう書いてあった。本人の承諾を得ずに、披露してしまい申し訳ないが、うれしかった。手紙も園長通信もそうだが、書いたものは残る。人に見せることもできる。

「授業者である〇〇先生とも教材についてたくさん語り合えました。また、参観いただいた国語科の先生とも学び合えました。」とあった。国語の先生が、国語の先生と、教材についてたくさん語り合ったのである。そんなことは当たり前だろうと思われるかもしれない。ところが、実際には、意外とこのような機会は少ないのが現実である。教材について話すのではない。語るのである。語り合うのである。国語科の先生から学ぶのではない。学び合うのである。いいではないか。殻を破った先生の『故郷』の授業は、このようなことにも支えられていたのである。

「次は私の指導案で、私の勝負の授業を見ていただくことができたらいいなと思います。」この一文が一番よかった。うれしかった。私の授業ではない。私の“勝負”の授業である。教員は、昔からよく「授業で勝負する」と言われてきている。だが、授業で勝負している先生は、現実には、どのくらいいるだろうか。授業で勝負できる先生は、いったい、どのくらいいるだろうか。この先生は、数少ない“勝負できる先生”である。ぜひ、勝負してほしい。そして、できれば、若い先生方に、この先生の授業を見てほしい。ぜひ、見せたい。

私も、この先生の“勝負の授業”を見る日が来るまで、自分を磨いていこうと思う。ここ一月で、中学３年生の『故郷』の授業を３回も見ることができた。幸せな時間だった。何より“殻を破った授業”と“勝負できる先生”の授業を見ることができたのは大きかった。お二人のご労苦に敬意を表し、お二人を支えたまわりの先生方のご努力に感謝したい。

この先生は、園長通信を何度も何度も読んでくれた。文面には、「私の心の財産になりました」とあった。私も、お手紙を何度も何度も読み返している。私の宝物がまた増えた。うれしい限りである。中学生の真剣な眼差しや瑞々しい感性を引き出してくれた先生方に感謝するばかりである。